



MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

医学部 教授（感染症学教室）

岩田 敏

海外渡航と感染症

塾生の皆さんは、留学・休暇などで海外に行ったり、長期滞在したりといった機会が多いと思います。そのような際に注意しなくてはならないのが、感染症への対応です。近年、交通網の発達に伴い、感染症のグローバル化が問題となっており、感染症をもらわない、持ち込まない、持ち出さないためにも、感染症に対する正しい知識を持ち、感染予防に努めることが大切です。

昨年から西アフリカを中心に流行しているエボラウイルス病の伝染力は、毎年国内でも流行するインフルエンザとほぼ同じですが、発症した場合の致死率が40～50%と高いことから、世界的に恐れられています。このような地域には、必要がなければあえて立ち入らないという選択が可能です。実はエボラウイルス病以外にも、重症肺炎を起こしやすい中

東地域の中東呼吸器症候群（MERS・Middle East Respiratory Syndrome）や中国の鳥インフルエンザA（H7N9）やウイルス感染症、熱帯地域を中心に流行がみられるデング熱・マラリア・黄熱病、途上国で問題となるコレラや赤痢などの腸管感染症・寄生虫疾患、エイズやB型肝炎などの性行為感染症など、挙げればきりがありません。また、さまざまな感染症が世界には存在しています。渡航先ではこのような感染症が身近にあるということに意識し、渡航先の感染症情報を出発前に必ずチェックするようにしましょう。厚生労働省検疫所の情報サイト「FORTH」(<http://www.forth.go.jp/>)などを参照されると良いでしょう。

いによる手指衛生は、医療関連施設における感染防止対策においても、最も基本的かつ重要な手技として位置づけられています。ワクチンにより予防が可能な疾病（VPD：Vaccine Preventable Diseases）に対してはワクチンを接種するということが、感染制御の原則です。しかし、風疹・水ぼうそう・おたふく風邪などの生ワクチンによる予防接種は、小児期から数えて2回の接種を完了しておくことが重要です。また渡航先の状況によつては、A型肝炎、B型肝炎、髄膜炎菌感染症、黄熱病などの予防接種を受けたい方が良いでしょう。分からないことがあれば、保健管理センターやかかりつけの医師に相談してください。

渡航先の感染症を知って、安心・安全な海外での滞在を楽しんでください。